



Data

監督: ウォッシュ・ウエストモアラ
ンド

出演: キーラ・ナイトレイ / ドミニク・ウェスト / デニス・ゴフ / フィオナ・ショウ / エレノア・トムリンソン / ロバート・ピュー / レイ・パンサキ

👁️👁️ みどころ

今や日本でも若手の女流作家が花盛りだが、19～20世紀の英仏では、メアリー・シェリーやマルグリッド・デュラスの他、コレットも！

本作で描かれた大人気の『クロディーヌ』シリーズも、コレットの恋の遍歴も私は全く知らなかったが、“男装の麗人”との怪しげな交際を含め、自立？創造？セクシー？スキャンダル？等の魅力がいっぱい！

私でもわかるキーラ・ナイトレイの魅力的なファッションを味わいながら、コレットの生きざまをしっかり確認したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□コレットって誰？フランスにこんな有名な女流作家が！■□

私は子供時代に世界文学全集を読み漁ったから、『高慢と偏見』のジェイン・オースティンや、『嵐が丘』『ジェーン・エア』のエミリー・ブロンテ、シャーロット・ブロンテ姉妹等、有名な女流作家は知っているつもりだった。ところが、近時観た『メアリーの総て』（17年）で、私は18世紀末の産業革命の時代に怪物フランケンシュタインを産みだした女流作家メアリー・シェリーをはじめで知った（『シネマ 43』未掲載）。また、『あなたはまだ帰ってこない』（17年）で、ゲシュタポに連行された夫を待つフランスのレジスタンスの妻を主人公とした自叙伝的小説『苦悩』を書いた、フランスの女流作家マルグリッド・デュラスをはじめで知った。そして、私もよく知っている映画『愛人 ラマン』（92年）の原作は、彼女が70歳の時に書いた自叙伝的小説だということを知ってビックリさせられた。世の中にはホントに知らないことが多いもの。そう考えると、映画は何とも便利な勉強のツールだ。

しかして、本作の「コレット」とは一体誰？コレット役で主演するのは私の大好きなイギリス人女優キーラ・ナイトレイだが、コレットの書いた『クロディーヌ』（シリーズ）や、『シェリ』『わたしの修業時代』等は、かなり有名な小説らしい。また、1873年生まれの彼女は、第一次世界大戦中は「ル・マタン」紙の記者として、前線からレポートする初の女性の1人となったうえ、第二次世界大戦後の1951年にはオードリー・ヘプバーン主演で「ジジ」がブロードウェイで舞台化されるについて、コレットが彼女をキャスティングしていたそう。さらに、死亡した1954年には、女性では初の国葬が行われたそうだから、すごい。

■知らぬは一時の恥！しっかりコレットのお勉強を！■

本作は、そんなシドニー＝ガブリエル・コレット（キーラ・ナイトレイ）が、14歳年上の人気作家（？）であるアンリ・ゴーチエ・ヴィラルール（愛称ウィリー）（ドミニク・ウエスト）に見い出され、結婚し、成長していく若き一つの時代を切り取った映画だが、コレットもナチス占領時代には、ユダヤ人だった3番目の夫、モーリス・グドケがナチスに連行される苦悩を味わったそうだから、マルグリッド・デュラスと同じような苦悩を味わったらしい。そんなコレットの生涯を描けば、紋切り型の伝記映画になってしまう恐れもあるが、本作はそうではなく、コレットが最も輝いていた20歳から30歳頃の時代を切り取り、その独特の斬新な生き方を描いたもの。そんな映画には、キーラ・ナイトレイは実にピッタリだ。

ドレス姿の美しさは、『プライドと偏見』（05年）（『シネマ10』198頁）、『つぐない』（07年）（『シネマ19』306頁）等で実証済み。また、演技力の確かさは、『わたしを離さないで』（10年）（『シネマ26』98頁）や『危険なメソッド』（11年）（『シネマ29』121頁）、『イミテーション・ゲーム/エニグマと天才数学者の秘密』（14年）（『シネマ35』29頁）等で実証済みだ。知らぬは一時の恥！女流作家コレットを知らなかったことを恥じるよりも、本作でしっかりコレットのお勉強を！

■あの時代の女流作家は所詮ゴーストライター！？■

『メアリーの絵で』でも、メアリー・シェリーはせっかく吸血鬼のインスピレーションを得て、それを精魂込めて書き上げ、夫のパーシーからも「これは傑作だ」とのお墨付きをもらったにもかかわらず、出版社からは、女性作家というだけで断られたり、「ホントの著者は夫のパーシーだろう」と疑われたりする始末だったから、18世紀末の産業革命の時代のイギリスでは、女流作家の名前でヒット小説を出すのは大変だった。そんな状況は、コレットが20歳代を過ごした19世紀末から20世紀にかけてのフランスでも同じだったらしい。もともと、ウィリーは自分で小説を書くよりもゴーストライターに書かせ、それを売る商才に長けていたから、今で言えばさしずめ幻冬舎の見城徹氏のような人物・・・？

ウィリーがお抱えのゴーストライターとの諸条件でもめ事になり、1人また2人と彼から去って行くと、有能なウィリーが、目の前にいたとおきのゴーストライターに注目したのは当然。そして、もともとモノ書きが大好きだったコレットが、フランスの田舎町で育った少女時代の体験を瑞々しく描いた「学校のクロディーヌ」を書き、ウィリーの名前でこれを出版すると、大ヒット！その続編として立て続けに出版した、「パリのクロディーヌ」(01年)、「家庭のクロディーヌ」(02年)、「去りゆくクロディーヌ」(03年)も大ヒットしたから、ウィリーはホクホク顔だ。さらに、魅力的な若い女性クロディーヌは当時のパリを代表する顔となり、舞台化はもとより、化粧品等あらゆる商品のブランドとして、パリを席卷していった。そんな中、コレットも当初は「自分の役割は、所詮ゴーストライター」と納得していたが、次第に自分が作者であることを世間に認められない葛藤と夫の度重なる浮気に苦しめられるようになってきたのは当然。さあ、こんな2人の夫婦関係はいつまで順調に続くのだろうか？

■□■ウィリーもやり手だが、コレットもかなりかなり・・・■□■

コレットを含む多くのゴーストライターの才能を見抜いたウィリーの能力が大したものなら、『クロディーヌ』シリーズの相次ぐ出版や、そのブランド化の試みも大したもの。また、「浮気は男の性(さが)だ」という弁解を、14歳も若い妻に納得させたテクニックが巧みなら、謝ったり、別荘をプレゼントしたりして妻のご機嫌をとるテクニックも巧みだ。さらに、自ら、私こそ「生けるクロディーヌ」と売り込んできた女優、ポレール(アイシャ・ハート)との浮気を公認してもらおう(?)代わりに、コレットが、貴族の家系で、父親がナポレオン3世の異母兄弟だという男装の麗人ミッシー(デニース・ゴフ)と浮気する(?)のを公認したウィリーの太っ腹(戦略)も大したもの。今でこそ男女同権の主張を大きく超えてLGBTの議論が盛んになっているが、20世紀に入っただけのコレットが生きた時代、同性愛はもちろん妻の浮気を公認するのは、かなり勇気のいることだ。したがって、本作中盤に見るウィリーとコレットとの夫婦生活やカネの取り扱いに関しては、ウィリーのやり手ぶり、横暴ぶりが目立つが、コレットだってかなりかなり・・・。

文章を書くのが少しマシなだけの田舎娘だったコレットが、ここまで自分の生き方を徹底できるまでに成長できたのは、きっと反面教師としてのウィリーの存在があったからだろう。もっとも、ウィリーがコレットに買い与えた別荘を守るためとはいえ、コレットに黙って『クロディーヌ』シリーズの著作権を売り払ってしまったことを知って、『クロディーヌ』シリーズを自分の命と考えていたコレットがキレてしまったのは仕方ない。そんなコレットは、ウィリーを見限った後は、一緒に舞台にも出演しているミッシーとの怪しげなロマンスをますます深めていくことに・・・。

ちなみに、本作では描かれていないが、パンフを読むと、コレットがウィリーと離婚した後の男性遍歴(?)はかなりのものらしい。本作で最初に登場したお下げ髪のかわいら

しい田舎娘も、1951年にオードリー・ヘップバーンをキャスティングする頃になると、かなりかなりの“存在”になっていたようだ。私としてはそんな（老後の）姿はあまり見たくないが、本作の段階でもウィリーもやり手だが、コレットもかなりかなり……。

■魅力はどこに？自立？創造？セクシー？スキャンダル？■

もともと、キーナライトレイ自身が女性的な魅力の他、不思議に中性的な魅力も備えているが、本作では、14歳も年上の夫ウィリーとの関係が悪化し、男装の麗人ミッシーとの仲が深まっていくにつれて、コレットの本来のセクシーさとは別の中性性が増加していくことになる。他方、「生けるクロディーヌ」を自称する女優ポレールとウィリーの前で張り合う姿を見せるコレットを見ていると、そこは女らしい魅力でいっぱい。さらに、コレット自身が舞台上に立ち、露出度の高い衣装を着て『エジプトの夢』の主役を演じている姿を見ると、ゾクゾクするほどの魅力が……。

ちなみに、当時のフランスでは女性が男装すると警察に逮捕されたそうだが、ミッシーをまねたネクタイ・スーツ姿の男装をしたコレットが魅力的なら、紺色のセーラーワンピース姿のコレットも魅力的。私はこんなファッションを見て思わずオードリー・ヘップバーンのファッションを思い出したが、それは逆で、コレットがヘップバーンの才能を見出す中で自分のファッションのセンスを伝えたというのが真相らしい。オードリー・ヘップバーンのファッションにも共通する、「クロディーヌ」のファッションが、本作ではコレット自身はもちろん、ポレールやミッシーを通して表現され、その魅力が顕著になるので、男の私でもそれに注目することができる。すると、そんな本作では、男装の麗人ミッシーとコレットとのベッドシーンを如何に表現するの？そんな点にも怪しげな興味が……。

他方、書くことが大好きなコレットは当初はウィリーのゴーストライターだけで満足していたが、その後、自立、創造への欲求を強めたのは当然。彼女が一心不乱にペンを走らせる姿は『メアリーの総て』で見た作家メアリー・シェリーと同じだが、怪物フランケンシュタインしか友人がいなかったメアリーに対して、コレットはセクシーさ、スキャンダル性でも魅力的だったから、その周りにはいつも魅力的な友人でいっぱいだった。とりわけ19歳から34歳までのコレットを描く本作では、そんなコレットの魅力がいっぱいだから、しっかりそれを楽しみたい。

2019（令和元）年5月28日記